研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-137		20-087	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

The association between medication or alcohol use and the incidence of frailty: a retrospective cohort study

薬物、アルコールの服用とフレイル発症の関連：レトロスペクティブコホート研究

執筆者

Jazbar J, Locatelli I, Kos M.

掲載誌

BMC Geriatr. 2021 Jan 7;21(1):25. doi: 10.1186/s12877-020-01969-y.

キーワード	PMID
Frailty インデックス，Frailty 表現型，追跡研究，薬物治療，アルコール服用	33413145

要　旨

目的：フレイルリスクに影響を与える潜在的に修正可能な要因を理解することは、現代の喫緊の公衆衛生上の課題の解決にとって重要である。本研究では、高齢者における各種薬剤やアルコール使用とフレイル発生との関連を評価する。

方法：本研究は、高齢者（65 歳以上）を対象としたレトロスペクティブコホート研究で、欧州における健康・加齢・退職・老後に関する縦断的な調査（SHARE 調査、28 カ国）のデータを用いた。薬物使用は、複数の異なるグループの医薬品を服用しているか調査し、アルコール服用は、AUDIT-C を含む SHARE の質問項目で評価した。アウトカムは、2 年後のフレイル発生で、Mitnitski らのフレイル指数（FI）と Fried らのフレイル表現型（FP）で定義した。多重ロジスティック回帰モデルを用いて、いくつかの潜在的な交絡因子を調整した上で、関連性を評価した。

結果： FI の評価実施集団 14,665 人のうち、1,800 人（12.3%）が 2 年以内にフレイルを発症した。FP の評価実施集団では、8,133 人のうち 2,798 人（34.4%）がプレフレイルになり、247 人（3.0%）がベースラインから 2 年以内にフレイルを発症した。潜在的な交絡変数を調整した結果、アルコールを服用しない場合と比較して、危険ではないアルコール使用（FI 集団での調整 OR: 0.68, 95%CI: 0.60-0.77）および危険なアルコール使用（OR:0.80; 95%CI:0.68-0.93）は、フレイル発生率が低かった。薬の服用は、フレイル発生が高く、慢性気管支炎の治療薬を服用している高齢者で最も高く（OR；2.45; 95%CI 1.87-3.22（FI 集団））、関節痛などの痛み止め(OR:2.26; 95%CI 2.00-2.54)、冠動脈疾患などの心臓病の治療薬(OR:1.72; 95%CI 1.87-1.54)、糖尿病の治療薬（OR:1.69; 95%CI 1.46-1.96)、不安・抑うつ・睡眠障害の治療薬（OR:1.56; 95%CI 1.33-1.84)であった。さらに、脳卒中、パーキンソン病、認知症では、フレイルのリスクが高かった。

結論： 特定の薬を服用していると、フレイルやプレフレイルの発生率が高まることが明らかになり、薬の使用または基礎疾患のいずれかに起因する可能性が考えられた。アルコールの服用は、服用しない場合と比較して、プレフレイルおよびフレイルのリスクの低下と関連していたが、これは因果の逆転または残余の交絡による可能性がある。フレイルの発生に対して薬剤とアルコール服用の有意な交互作用についてはみられなかった。